
雨が降っていた。

竜ヶ崎実祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が降っていた。

【Zマーク】

Z9591S

【作者名】

竜ヶ崎実祐

【あらすじ】

ある夜、タクシーに乗った男の話。

(過去に学校で作成した部誌に掲載したものです。)

外は冷たい雨が降つていて、窓ガラスが指で落書きできるくらいに曇つていた。母親に、跡が付くからやめなさい、と、子供の頃に注意された記憶が蘇る。

微妙にレースちっくな座席に座ると、一瞬何かに呼ばれた様な気がして、現を抜かす。はつと我に返り、行き先を告げると、「はいよ」と軽い返事が返ってきた。車は発進する。

しばらくしないうちに、赤い信号でそのタクシーは止まった。バラバラバラ、と水滴が、さらに強くなつた気がした。

「お客さん」とタクシーの運転手が呼びかけた。「お客さん、あれだ、その、”P.S.”の誰かに似てないかい？」

口調は軽い。運転手の方がどう見ても年輩だからかもしれない。実際のところ、客は二十代だった。車が再び発進した。

「カモメのことですか？よく言われますよ」

彼は愛想良く言つた。声は微かに甘く、そこまで低くもない。高くもない。おそらく。

”P.S.”と呼ばれるのは、”Phantom Ship”というアイドルグループのグループ名で、カモメといふのは当然、そのメンバーの一人、正確に言えばその一人の渾名だ。

「チイ、残念だなあ。姪っ子がファンでね、サインでももらおうかなんて思つてたんですがね」

外の夜の雨の空氣と似合わず、運転手は陽気な人物と見て取れる。その声を聞いて、客は微かに苦笑した。

ふつ、と微かな甘い香り。彼はゆらりと目蓋を閉じそうになり、慌てて目を開いた。寝てはいけない。

「お密やん、寝こんだり田舎地で起しあるよ?」

「いえ、平氣です」

密は作り笑いを浮かべた。冷や汗が出てきたことを、気付かれなによつて。

「なら……退屈じのやうに、何か話を聞かせましょつか?」

「いいですね」

彼は即座に言った。

「お密やん、寝てるときつて、よく夢見ます?」

「夢、ですか?」

少しつづいてしながら、密は聞き返した。

「そう、将来の『コメ』、とかいう方じやなくてね」

「まあ……やたらと非現実的な夢を」

夢なんてそんなものでしょ!けど、と密は付け加えた。

「ど、いつど?」

運転手が重ねて尋ねた。

「空飛んだりとか」

「ふむ」

「銃撃戦に巻き込まれたりとか」

「ふむふむ」

「手からピーム、とか」

「なるほどなるほど」

最後だけ無駄に現実離れしていく。

「最近、何かの本で読んだんですけどね」

と唐突に、運転手は語りだした。

「その、眠っているときに見る『夢』も、いくつかの形で分けられるやうなんです。覚醒夢、予知夢、丘廻夢……あと一般的ではないけれど、『役田』夢、とか」

「…………あの、じつめつ」とかわつぱりわからないので、わかりやすく説明していただけますでしょ!つか」

客の口調は、思わずバカ丁寧になつた。

「ああ、すいませんね。ヤクメム、といふのは私が勝手に付けた呼び方でね。本当は他の呼び方があるのかもしれませんが」

客は心の中で舌打ちした。話の内容が、結局は余計眠氣を誘つような気がして。

運転手は語る。

「例えば、死者の案内人とか、化け物を払う人とかね、あと、確かに雑用係なんてものもあつたなあ……ま、とにかくそういう、ちょっと現実離れした役割を、定期的に、時には不定期的にやつていて、そういう夢のことですよ。見たことがあります？」

客は無言で首を振つた。運転手は話を続けた。

「もちろん、その夢は現実離れしている、けどやつてていることはいつも同じ。現実とは違う立場にいながら、現存する人物と出会い、つまり、」

雨が少し、弱まつたような気がした。

「別の現実を、生きている」

「…………なんつうか、ファンタジーみたいな話ですね」

「おですか？」

雨粒だらけの窓の外が、一段と暗くなつている。

「そんな人たちが夢の中で死んだら、どうなると思ひます？」

またなにかの、甘い香り。

「そこで、目が覚めるのでは？」

無闇に襲つてくる眠氣と戦いながら、客は答えた。

「殆どが、そんなんですけれどねえ」

運転手に、何一つ変化はない。

「稀に、いるんですよ。そのまま本当に死んでしまつたりだと、そのまま夢の中に居座るしかなくなる人がね」

「なぜ……」

「そう、現實で病氣や怪我が人の身動きを取れなくするように、夢の外から一步も出れなくなつてしまふんですよ。もちろん、そこか

ら抜け出す方法が、何一つないわけではありませんが、……」

当然のことながら、彼からは運転手の表情を直接見ることはできなかつた。ミラーを通して、目を見ることしかできなかつた。目は、確かに笑つていた。声も、また

途端に彼は、目が覚めた気がした。いや確かに、まだあの得体の知れない甘い香りがまとわりつき、今にも眠つてしまいそうではあつたが、確かに彼のどこかが目を覚ました。

「……すいません、俺、行き先どこで言いましたっけ」

「なにいつてるんですか」

運転手は今度こそ本当に笑い混じりに言つた。

「誰でもいつかは通るところ、ですよ」

思わず外を見た。窓の外は、彼の知らない場所だつた。だつて少なくとも彼は、こんな、夜になると影も灯りもないような場所は知らない。一度も来たことがない。

「降ります」

言つた否やドアの鍵に手をかける。しかし鍵は動かない。

「走行中ですよ、お客様さん」

運転手が愛想よく、そう言つた。

「なら、今すぐ止めなさい」

凛とした声が響いた。

いや待てよ、そもそもここには女なんて乗つてなかつたはず……
彼が右を向くと、いつのまにか座席に堂々と足組んで座つている、奇妙な格好の人物がいた。

ぱつと田に入るのは、立つても引きずりそつな、長く真っ白な上着。その上着についたフードを田深にかぶり、そのフードの下からは長く黒い髪、しつかりと「見えない」白い顔。上着の下に着込んでいるのは無地の黒服。首の下から靴の先まで、真っ黒。

「やだなあ、勝手に乗り込まれちや。困りますよ、まだ別のお客さんが乗つていいんですから」

全く困つていないうるな口振りで、運転手が話す。

「警告した筈です、勝手な真似はするなど。今すぐここで彼を降ろしなさい」

当の彼は突然の来訪者に戸惑つばかりである。

く、と来訪者は彼のほうを向いた。向いたが、フードのかぶり方が深すぎて、目を見ることができない。

「あんた、名前は

さつと思わず顔を背ける。

もしかして、バレた……

「あ、自分の名前わかつてんのね、ならいいや

あっけんからんとした声。なにがなんだかわからないまま、ぐい、と右手を掴まれる。

「降ります」

来訪者は断言すると、自分の側のドアの鍵をあっさり開け、ドアを勢いよく開き、彼の右手を掴んだまま外へ

「チイ、あと少しだったのになあ」

最後に、運転手の声が聞こえた。

「あ、目え覚めた。カモメ平氣か？」

消毒液のにおい。医務室だろ？ ライブのリハ初日に運ばれるとは、思つてもみなかつたが。

「……おう

なんとも弱い返事をした。

彼、いや、アイドルグループ”Phantom Ship”の力モメは、ベッドから起き上がつた。

「えーと、何が起きたんだ……？」

力モメが尋ねた相手は、唯一医務室にいた”P・S・”のリーダーである。

「……ステージからの転落。アタマから落ちてそのまんま。救急車呼んだらしきけど……ま、今日はひとまず病院行つとけ。本番で倒

れられたらしゃ あないし

「……」

頭を触ると、後頭部に「ぶが」できていた。凹んでないぶんましだが。あと、外が喧しい。

人呼んでくるから待つて、と割と冷静なリーダーに一人残された。

ぼんやりと、カモメは夢の内容を思い浮かべた。

夢の終わりに出てきた、あのよくわからない女は、現実にもいるのだろうか、なんて、今思つべきでない考えが、浮かんだ。

to

be continued... ?

(後書き)

ども。竜ヶ崎です。

この作品は、例によつて使い回しの作品あります……しあつがないのさ、そんなに書くの速くないし。

作中に出てくる力モメは、今後あたしの他の作品にも出てくる「予定」です。だからその枠で困っちゃつて、連載にしてしまえ!と思つたのですが、めんどくさい。だから気が向いたらやるつもり。誰もワタシの小説に、感想書いてくれないよー!とこうことで、只今こき下ろしを絶賛募集中でござります。面白くもなんとも無いだらうけれど、うん、感想ゼロ件は悲しいよ!

読んでくださつた方に感謝。駄文乱文失礼します。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9591s/>

雨が降っていた。

2011年5月3日15時09分発行